京（みやこ）にフランスあり！

アンスティチュ・フランセ関西（関西日仏学館）の草創期

ミッシェル・ワッセルマン
立木康介

京（みやこ）にフランスあり！

アンスティチュ・フランセ関西（関西日仏学館）の草創期

ミッシェル・ワッセルマン
立木康介

目次

はじめに……1
九条山から吉田へ
関西日仏学館「新館」八〇周年を記念して……5
資料アルバム……21
動乱の時代の関西日仏学館（一九四〇～一九四五）……41
あとがき……57

はじめに

京都大学人文科学研究所にて「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」がスタートしたのは二〇一四年だった。明治期以降、東京とは歴史も伝統も異なる旧都・京都において、知の近代化がいかに進められ、いかなる道を辿ってきたのか、いいかえれば、欧米の学問や思想がいかに受容され、それが近代以前の伝統的な知や文化にいかに接合されてきたのかを、明らかにすることをめざすこのプロジェクトは、七つのサブ・テーマから成り、そのひとつに「京都における日欧交流史の初期調査」、すなわち、京都を舞台にした日本とヨーロッパの文化的・学術的交流の発展史を辿るプロジェクトが盛り込まれた。

もとより限られた人員と予算で進めるほかない取り組みであるゆえ、私たちは当座の目標をこう設定した。調査の対象をフランス、とりわけ、京都における日仏文化交流の文字どおりの中心地であるアンスティチュ・フランセ関西（旧関西日仏学館）*の活動に絞り、同学館所蔵の資料に当たることからはじめよう、と。ところが、これがすでに一筋縄ではいかない作業であることがたちまち判明した。というのも、一九二七年に創立されたアンスティチュ・フランセ関西の九〇年に及ぶ歴史を証言する資料は、わずか数箱の未整理の段ボールを除い

＊二〇一二年九月、フランス大使館文化部と東京日仏学院、横浜日仏学院、関西日仏学館、および九州日仏学館が統合され、新たに「アンスティチュ・フランセ日本」が発足した。それに伴い、関西日仏学館は「アンスティチュ・フランセ関西」と改称された。

て、学館の内部にほとんど残されていなかったからだ。その理由はいくつかあるが、第二次世界大戦末期、学館の建物が日本軍に事実上接収されるに及び、相当数の資料が紛失した可能性があること、また、当時学館講師であったジャン＝ピエール・オーシュコルヌ氏と宮本正清氏が特高警察により逮捕・投獄される際に、多数の文書が押収されてしまったことは、取り返しのつかない損失だった。そしてその後も、学館にかかわる文書は折々に本国に送られ、現在はフランスの二つの外交文書センター（パリ近郊ラ・クルヌーヴとナント）でしか閲覧することができない。

それゆえ、もともとささやかだった私たちの目標は、さらに限定されたものになった。それはいまや、アンスティチュ・フランセ関西にかかわる歴史資料の「コーパスを確立すること」に措かれた。この目標は、今日、ほぼ達成されたといってよい。私たちがフランスからデジタル写真ファイルの形で持ち帰った資料は一七八二点にのぼり、学館に残されていた資料と合わせて、すでに二七〇〇点を下らない。それに加えて、この研究領域でのパイオニアといってよい二人の偉大な先人が私たちに力を貸してくれた。まず、我が国のロマン・ロラン研究の第一人者として活躍し、関西日仏学館創設当初から事務局長、そして講師を務めた故・宮本正清氏の夫人で、現在ロマン・ロラン研究所理事を務めておられる文筆家・宮本ヱイ子氏。アンスティチュ・フランセ関西の歴史のみならず、まさに京都における日仏交流の歴史そのものを緻密に再構成し、今日においてもその道では並ぶもののない名著『京都ふらんす事始め』の著者でもある宮本ヱイ子氏は、夫・正清氏の時代から私蔵しておられる貴重な資料二八八点を私たちに提供して下さった。もうひとりは、かつて関西日仏学館館長を務め、現在も立命館大学で教鞭を執る傍ら、オペラ演出家としても活躍するミッシェル・ワッセルマン氏。ワッ

セルマン氏の手許にコピーの形で保存されていた文書四九点もまた、私たちが確立しつつある資料コーパスの重要な一角をなしている。

こうして着実に集まってきた資料群には、もちろん、コーパスの完成を待ってはじめて繙くには魅力的すぎる品々も含まれていた。そこにあるものをただ寝かせておくことほど非生産的なことはない。実際、これらの資料を活用する機会はすぐに訪れた。二〇一六年六月に関西日仏学館竣工八〇周年を記念して催された講演会「八〇年に渡る日仏交流」、及び、二〇一七年一〇月にアンスティチュ・フランセ関西創立九〇周年を記念して開催されたシンポジウム「京（みやこ）にフランスあり！――アンスティチュ・フランセ関西の歴史と記憶――」である。そのいずれのイベントにも講演者として参加し、私たちの資料を活用してくれたのは、ほかならぬワッセルマン氏だった。

本冊子にまとめられた二編は、この二つの機会にワッセルマン氏が行った講演の翻訳である。本プロジェクトがスタートした当初、私たちが意図して優先的に収集に当たったのは、学館が創設された一九二七年から第二次世界大戦終戦までの時期の資料だった。というのも、その時期の資料の点数が限られている（つまり、その部分についてはコーパスを完成させやすい）ことは分かっていたし、終戦間際の数か月を除いて、戦前・戦中も学館が一貫して活動を続けていた事実（この点は宮本ヱイ子氏のご本にも詳しい）は、早くから私たちの関心を惹きつけていたからだ。加えて、もともと九条山に建てられた学館が、一九三六年に現在の場所、すなわち京都大学に隣接する左京区吉田泉殿町に移転するに当たり、同じ用地をめぐってドイツとフランスの大使館が争い、その結果、ドイツ文化研究所（一九三四年～四五年）と関西日仏学館とが、ワッセルマン氏曰く「互

いに威嚇しあ」う二羽の「闘鶏」のように並び立つことになる一幕は、極東の旧都が忽然と、一九世紀から続く仏独世界文化戦争の最前線のひとつに浮上したという意味で、国際都市としての京都の歴史的側面にあらためて光を投げかけずにおかない。いうまでもなく、京都もまた「世界史」から切り離されて存在することはできないのである。

第一編「九条山から吉田へ」において、一九三〇年代のこの一幕に焦点を合わせたワッセルマン氏は、続く第二編「動乱の時代の関西日仏学館」では、戦時中、とりわけ終戦間際の時期の学館とそのスタッフの運命を取り上げてくれた。この第二編のテーマについては、私たちがフランスから持ち帰った資料だけでは情報に乏しく、ご不便をおかけしたかもしれないが、ワッセルマン氏はご自身の所蔵する資料を「持参」してこのテーマに臨んでくれただけでなく、まるで宝石のような個人的回想を披露して、戦火に翻弄されるロベール館長（当時）や宮本正清氏、そして何よりもオーシュコルヌ氏の姿をいきいきと描き出してくれた。本プロジェクトの完成にはまだ「オーラル・ヒストリー」部門を設ける余地があることに思い至らせる貴重な証言である。

これら二編の講演を通じて、ひとつのことが浮き彫りにならないだろうか。すなわち、アンスティチュ・フランセ関西（旧関西日仏学館）の歴史は、紛れもなく近代京都の歴史の一部である、ということだ。一九二七年にオープンして以来、「京都のなかのフランス」としてつねに存在感を放ち続けてきたアンスティチュ・フランセ関西と京都の人や文化が、世界史の試練にも耐え抜いたこの堅固なパートナーシップを、今後もさらに弛みなく発展させていくことを願ってやまない。

立木　康介

九条山から吉田へ

関西日仏学館「新館」八〇周年を記念して

ミッシェル・ワッセルマン
立木　康介　訳

フランスと日本の二国間協力は、しばしば、これからお話するような形をとります。[1] 本日私たちが八〇周年をお祝いするこの建物の存在は、学館創設者としてのポール・クローデルの働きに間接的に負うています。クローデルは、駐日大使の任にあるあいだに（一九二一～二七）、東京のフランス文化センター「日仏会館」の設立計画を見事に実現させていました。それは、地元の親仏家団体の提案を受け、クローデルの前任者のひとりによって、一九一四年にスタートした計画でした。クローデルが駐日大使に任じられたのは、外交官としての彼のキャリアのなかで比較的遅い時期でしたが（当時五三歳だったクローデルは、フランス大使という顕職にようやく昇格したばかりでした）、それ以前には、戦争で日本に屈辱的な敗北を喫した病める帝国・清が一九一一年の革命へと向かう決定的な時期に、一五年間にもわたって中国各地で様々な任務に当たっていました。それゆえ、フランス外務省は、クローデルを東京に赴任させるに際して、極東問題を知り尽くしたこのベテラン外交官に、きわめて野心的な目標を指示していました。とりわけ期待されていたのは、禁輸的高額関税のゆえに暗礁に乗り上げていた、仏領インドシナと日本の通商関係の改善に向けての取り組みでした。当時の仏印財界には、関税障壁を設けなければ、安価な日本製品に市場を席巻されかねないという懸念が広がっており、そうした懸念を払拭するために、仏印政府は禁輸的関税に踏み切っていたのです。フランス外務省にはまた、大作家クローデルの威光により、日本におけるドイツ文化の影響力を打ち負かしたいという思惑もありました。この影響力は、第一次世界大戦におけるドイツ帝国の敗北をもってしても、いささかも削がれることがありませんでした。実際、日本では、法学および医学をはじめとするいくつかの学問分野へのドイツの影響が顕著であり、ドイツ人は大戦後も日本の大学を闊歩していたのです。日

本側は、インドシナの関税措置の緩和を期待し、それをはっきりと日仏会館設立への資金援助の条件にしてきました。日仏会館の設立は、土地・建物への日本側の出資（クローデルが日本の「器」と呼んだもの）と、フランス側の補助による施設運営（クローデルのいう「中身」[2]）との結合により推進される事業として構想されていたからです。さて、一九二四年五月、その八か月前に東京と横浜を壊滅させた大震災について日本国民に弔意を表すべく（少なくとも、それが口実として用いられました）、仏印総督マルシアル・メルランなる第三共和政の要人に日本を訪問させる決定を、首尾よくフランス政府から取り付けたクローデルは、それをもとにまんまと一石二鳥を成功させることになります。すなわち、日本とインドシナの関税摩擦の解消に向けてフランスは本腰を入れる用意があるという感触を日本側にもたせる一方、日本側が資金援助の決定を行ったことで、日仏会館問題を打開することができたのです。その結果、一九二四年一二月、クローデルは同会館のオープンに漕ぎ着けることができました。日本学・東洋学の研究とフランス文化の普及に努めるこの新機関を、クローデルは「フランスから日本に文化的・経済的な影響をもたらす強力かつ堅固な手段」[3]と位置づけていました。

ところで、新設された日仏会館に向けて本国から出発する最初の寄宿者のひとりに、地理学者フランシス・リュエランがおりました。関西の地形をテーマに学位論文を準備していたリュエランは、一九二五年の大半を規定の休暇によりフランスで過ごしていたクローデル大使の知遇を得ます。京都を愛し、駐日大使としての在任中、日記から読み取れるだけでも八回、いかに些細なものであれ、口実を見つけては京都を訪れ、寺院や庭園を飽くことなく見てまわったクローデルは、東京と関西という二つの極をもつ日本のような国

で、フランス文化を根づかせる試みが首都以外の地域に及んでいないことを気にかけていました。実際、東京では一九一三年に、フランス語とフランス文化を教える私立機関アテネ・フランセがオープンしていました。それゆえクローデルは、どうやらリュエランと知り合った当初から、研究のために関西方面へ足繁く通う機会を利用して、当地の親仏家たちに新機関設立に向けての脈があるかどうか探りを入れるよう、リュエランに働きかけたようです。そうした親仏家のひとりが、関西財界に絶大な影響力をもち、完璧なフランス語を話す、大阪商工会議所会頭にして貴族院勅選議員、稲畑勝太郎でした。染色加工の大企業を営むこの破格の人物は、青年時代をリヨンで過ごし、そこで絹織物業者と交流を持つようになったほか、ラ・マルティニエール工科リセ時代の学友リュミエール兄弟の映画技術をフランスから持ち帰り、早くも一八九七年に日本初の映画上映を行ったという逸話の持ち主でもあります。リュエランを通してクローデルの意図を伝え聞いた稲畑は、待ってましたとばかりに資金調達に乗り出しました。すると、当時、大震災からの復興で手一杯だった関東に比べて、関西の景気がよかったことも幸いし、稲畑のもとには予想を上回る資金が集まります。そこで、爽やかな比叡山での「フランス語夏期講座」[4]という、気前のよい寄付者たちに当初提示されていた計画は早々に放棄され、市内に恒久的な施設を建設することが決まりました。とはいえ、稲畑がこのとき行った土地の選択、すなわち、京都を望むバルコニーのような場所で、それゆえ市の中心部に位置する学生街から離れていることは否めない九条山という土地の選択が、理に適ったものであったかどうかは、定かではありません。在大阪・神戸フランス領事アルマン・オーシュコルヌが伝えているとおり、「九条山の用地を自ら訪れた」クローデルは、新施設の館長となることが見込まれていた「リュエラン氏が自身の住宅を

建てるためにその土地を選択することには反対しないが、計画中の学館を建設するには文教地区に敷地を借りたほうがよいという意見でした。しかし、この示唆は受け入れられませんでした」[5]。

クローデルは、将来の学館の法律上の後見役を務めるべく結成され、駐日フランス大使を会長とすることが定められた二ヵ国財団「日仏文化協会」の設立会合の座長を務めた直後に、次の任地ワシントンに向けて旅立ちました。新たに建設される施設の館長には、述べたとおり、リュエランが就任することが決まっていました。一九二七年一一月にオープンしたこの施設は、切り立った丘の斜面を削って造成された台地にポンと置かれたような、とりたてて特徴のない西洋風の建物でした。計画を主導したリュエランには、貧をもって美徳とする傾向があり、学館がどちらかというと隔絶された場所にあるのも、彼に言わせれば、そこでなされる学びがそれだけ真剣になることの証なのでした。ところが、リュエランの後任となる日本学者ジョルジュ・ボノーの意見は、これとは異なりました。ボノーは地の利の乏しさを外務省事業部に訴えています。一九三二年にボノーの後を受けたルイ・マルシャンの考えは、リュエランのそれとさらに相容れないものでした。一九三七年に編まれた『関西日仏学館新館』のなかで追懐するように、マルシャンは「着任早々、学館の所在地が呈する数々の不便さを思い知らされました。眺めはたしかにすばらしい。しかし、市内の大学街から遠く、アクセスしにくいうえ、階段やら坂やらを登らねばならないという条件が合わさって、学生たちが近寄らなくなっているように見えました」[6]。マルシャンは、外国語としてのフランス語教育の実践家として歴史に名を残すほどの人物で、彼の書いた教本『初等フランス語教科書――デュポン一家』（一九二〇）は、第二言語としてフランス語を学ぶ人々に、何世代にもわたって用いられました。ドイツ語の高等教育教

授資格保持者であったマルシャンがこの教科書の構想を練ったのは、じつは、半世紀間のドイツ支配ののちにフランスに返還されたアルザス＝ロレーヌ地方でのフランス語教育のためでした。つまり、『デュポン一家』はもともと、ドイツ語話者に第二言語としてのフランス語を教えることを目的とした教科書だったのであり、語学学習におけるダイレクト・メソッド、すなわち、子供が母語を身につける過程の観察にもとづく外国語への自然なアプローチをヒントに、自由に着想したものでした。一九二三年から二五年にかけて、外務省から大阪外国語大学に派遣されたマルシャンは、ちょうど「西日本の諸都市を視察」中だったクローデルの目の前で、その名教師ぶりを実演してみせることになりました。クローデル大使は、任務報告書のなかで、この「卓抜なる教師」への讃辞を惜しみませんでした。曰く、マルシャンの「導入した瞠目すべき方法について、こう申し上げても過言ではありません、すなわち、それは生きた言語の教育に革命をもたらす性質のものであるように私にはみえます、と。私は専門家ではないゆえ、「デュポン一家」と呼ばれる教科書がいかなる価値をもつのかについて断定することはできません。[…] 私に言えるのは、我々の国語の学習を始めて僅か七か月しかたたない若者たちと、むずかしい主題についてフランス語で会話を行うことができたことです。これは見事な成果と申すほかありません。もうひとつ、私が驚いたのは、生徒が教師と共同作業を行うようたえず促される、これらの授業の活気、生き生きとした様子です。それは、私がルイ＝ル＝グラン高等学校でかつて受けたドイツ語の授業とは大違いです。あそこでは、『ヘルマンとドロテーア』の解釈を二時間もさせられてうんざりし、私はすっかりゲーテ嫌いになってしまったのです！」[7]

というわけで、外国語としてのフランス語教育のこの栄えある実践家が、フランスへの一時帰国を経て

――この帰国中、マルシャンはさらに一年間（一九二七～二八）米国の大学に派遣されています――、一九三二年四月一日、関西日仏学館の館長に就任します。九条山という場所が学館の発展には不向きであると早々に結論を下したマルシャンは、授業用の分館を建てられる土地探しに乗り出し、その結果、京都大学の玄関口といってもよい場所に、取得可能な用地を見いだします。そこは日本の文部省が所有する土地でした。マルシャンは、十月二八日の手紙で稲畑に事情を伝え、このメセナの了解を取り付けると、早くも一九三三年一月一六日の日仏文化協会理事会会合にて、自らの計画を提示するに至ります。このときフランスにいた大使に代わって会合の議長を務めた大使代理は、外務大臣に宛てた報告書のなかで、当時の状況を完結にこう説明しています――「学館に分館を新設する計画書を、マルシャン氏が理事会で読み上げました。それによると、分館は京都帝国大学の近傍に建てられるとのことでした。この計画の実現には〔…〕、学館の授業の場を京都市の中心部に移転させることで、ひどく足の便の悪い地域に置かれている学館に目下通学している人数よりも多くの受講生を惹きつけるという利点がございます。〔…〕我々が分館を建設できる見込みのある唯一の用地に日独学館を設立しようと、ドイツ大使館が用地取得に向けた活発な働きかけを試みたところをみますと、事態は急を要する性格を帯びつつあります。マルシャン氏のほうも、貴族院議員稲畑氏の支持を得て、日本の当局に接近し、日本側も問題の土地の一部を、無償で、学館に提供することに吝かでないように思われます。〔…〕我々の学館にかくも有利な場所を、この土地の寄贈というかたちで、獲得できる好機を逸してはならぬものと、私は思料致します。閣下にご異存がなければ、私は日本の文部大臣に個人的に働きかけ、学館理事会の取り組みを補佐して参る所存です」[8]。

その「働きかけ」は、三三年七月、この間に任務に復帰していた大使自らの手で行われ、日本の文部省は、おそらく仏独両政府から同時に要請を受けたせいで、若干ことを長引かせたものの、最終的に、求められている土地をおよそ二〇〇〇平米ずつに厳密に二等分し、両国に無償で貸与する決定を下します。もっとも、日仏文化協会は、はっきりとは定められていないものの、どうやら十年を越えない範囲の、将来のある時点までに、フランス側に与えられたこの半分の土地を購入することを誓約しなければなりませんでした（実際には、土地の購入は、フランス政府によって一九五〇年代末になされることになります）。

土地の問題が解決を見ても、まだ建物の建設というハードルが残っていました。関西財界の気前よさに頼ってからほんの五、六年しかたたないというのに、もう一度同じプロセスを踏もうとするのは、おそらく自明のことではありませんでした。学生層をもっと取り込む必要があるという状況は、学館を「山のてっぺんに」[9]建てようとした稲畑の判断ミスを浮き彫りにするだけに、なおさらそうでした。慎重を期して、マルシャンが最初に提案したのは、複数の建物を順次建設してゆくことにし、最初は「私たちの事業をもっと大きく発展させる準備が整うまでのあいだ使用できればよい木造家屋の建設」[10]から手を付けるというアイデアでした。そもそも、マルシャン本人の意向がどうであれ、九条山の建物を放棄するという選択肢はありえませんでした。この建物については、日本の実業家たちがかくも巨額の出費に同意し、建設にかかった費用一〇〇〇〇〇円のほぼ全額を負担してくれたのです。それゆえ、吉田地区に移転させるのは、教育活動のみでなくてはなりませんでした。研究および文化普及のセンターや、スタッフが寝泊まりする宿舎は、九条山に残される見込みでした。それゆえ、マルシャンは慎ましい新学舎の建設費を三〇〇〇〇円と見積もりまし

たが、やはりその三分の二は再び寄附で賄わざるをえない状況でした。

ところが、ドイツ人たちの登場により、どうやら事態は一変してしまいました。一九三四年四月一〇日、マルシャン館長は日仏文化協会理事会にこう伝えています――今後、「我々がもはや京都で唯一のインスティテュートでなくなることは〔…〕確実です。我々には隣人ができるのであり、〔仏独の施設が〕比較されるのを意に介さぬことはできません。新学館があまりに見劣りするようなことになれば、我々の事業に瑕がつくことは免れますまい」、と。

第一次大戦後間もなく、ドイツの政権がまだワイマール政府によって担われていた当時でさえ、クローデルの駐日ミッションは、先に見たように、フランスの「競争相手」となった「旧敵」[11]の以前と変わらぬ文化的優越を打ち負かすことにありました。いまやヒトラーが政権を奪い、一九三四年一一月に京都にオープンしたドイツ文化研究所[12]の初代館長を務める名高い日本研究者[13]が、前年にナチ党に入党していた事実を、フランス側はどんな気分で見守っていたことでしょう。

複数の建物を漸次建設していくが、当座は木造の慎ましい建築からスタートするという当初の計画は、こうしてあっさり放棄され、鉄筋コンクリート製の単一の建物を建設する案に変更されました。宿敵ドイツの手で造られた施設に向き合うことになるこの建物は、「世界にフランスが占める座」を例証するという明示的なプロパガンダ任務を果たすことになるでしょう。というのも、この世界のなかで、フランスは「ヒューマニティ、連帯、普遍的同胞愛といった心情」を際立たせるのであり、実際、フランスは「肌の色や人種にかかわる偏見」[14]に無縁であるのですから。

それゆえ、新たに造られる建物は、美しければ美しいほどよい、ということになります。その建物の建設に、稲畑は、仏独間の競合に矢も盾もたまらなくなったのでしょう、およそ十年前よりもなお――ほとんどありえないことですが――いっそう乗り気になって協力し、一九三四年一一月、パリの外務省事業部部長に「我々の分館は、すでに存在しているお隣の建物よりもっと立派な建物になると確信しています」[15]と請け合う一方、新たな計画に必要であると判断される資金二〇〇〇〇〇円の八割を集めることに成功します。日本の二つの建築事務所に設計案を求めた結果、最終的に日仏文化協会理事会の選を勝ち取ったのは、オーギュスト・ペレの弟子レイモン・メストラレのプロジェクトでした。理事会の面々が望んだのは、「見た目という点で、パリ国際大学都市の「薩摩館」〔現在では「日本館」の呼称が一般的〕と対になるような建物が、京都の文教地区に出来る」ことでした。「ご存知のとおり、薩摩館といえば、その見るからに日本的なスタイルのゆえに、フランスの首都で好奇の眼差しを注がれており」[16]、京都の学館の建物には、それゆえ、フランス古典主義の華やぎを際立たせることが求められたのです。実際、オーシュコルヌ領事によれば、学館の新たな建物は、そのファサードによって見事にそれを実現するに至りました。このファサードは領事の目に、「充と空の幸福なバランスによって、また、地面からコーニスまで伸びる長い円柱の数々によって、きわめて優雅」[17]であると映ったのです。加えて、フランスの行政が内装の面でとくに力を入れたのは、マルシャンの言葉を借りれば、学館を「教育機関というだけでなく、さらに美の集積地、つまり、建築、絵画、版画、家具から成る、これまで日本でも、極東全体でも見たことのないようなフランス美術の常設展示」[18]にすることでした。しかし、第二次世界大戦の最後の数か月に起きた装飾品や調度品の略奪と消失によって（一九四五年

四月から、学館は日本当局の命令で島津製作所に賃貸され、軍用精密機器工場がそこに設置されたのです）、不幸にも、学館内のこのような美観に取りかえしのつかない瑕が残りました。[19]

いずれにせよ、こうして、建物にかかわる文書から「分館」の文字が消えます。関西日仏学館とその諸機能の総体（教育、文化普及、各種レセプション、館長の宿舎）が吉田に移転することになったのです。一方、九条山の古い建物は、これ以後半世紀にもわたり、容赦なく放置されることになります。[20]

着工は一九三五年六月。工事はほぼ一年のあいだ続きました。一九三七年パリ万博でのナチス館とソ連館の睨み合いは、西洋近代の記憶の構造化をもたらしました。それに一年先駆けて、二つのインスティテュートが闘鶏よろしく互いに威嚇しあう物珍しいスペクタクルを前に、京都の人々がまったく同じ反応を示したと教えられるのは、なんとも皮肉が利いています。一九三六年一月一六日の大阪毎日新聞に写真入りで掲載された記事を読むと、そのことがよく分かります――

◇黒と白、犬と猿、およそ相對立する二つのものをとり上げる場合、ドイツとフランスの兩國は文句なしに對立させられるコントラストであらう

◇一はハーケンクロイツの簇の下ナチ一色のファッショ王國、一は今日なほ自由（リベルテ）が守り本尊の國、その獨佛兩國の文化研究所がわが大學街に肩をならべて建てられることは何といっても愉快なコントラストに違ひない

◇ドイツ文化のほうは一昨年十一月竣工以來大いに活躍してゐるが日佛學館は昨夏着工、今春三月末までに完成の豫定、建物もまたドイツ文化が簡素で直截なドイツふうなのに對し日佛學館は豪華でやはら

かいフランス風

◇この二つの建物を隔てる京大官舎へ通ずる小路はいまに〝アルサスの小徑〟などとよばれると〔ママ〕でせう[21]

「新学館」は、一九三六年五月二七日、今上天皇の大叔父に当たる東久邇宮の臨席のもと、開館しました。東久邇宮といえば、一九二〇年代初頭から六年間にわたりサン＝シールの陸軍士官学校に、次いでパリ政治学院に留学し、なかなか派手な私生活でパリの人々の噂の的になった人物です。おそらく、宮はこの懐かしい過去を郷愁とともに思い出していたことでしょう――新学館建設に尽力した人々への感謝や、この日仏協力の賜物のオープニングが呼び醒ます希望をこめて、十人十色で次から次へと連ねられる終わりなき祝辞の数々に、辛抱強く耳を傾けながら。

1 本編は、二〇一六年六月一六日、アンスティチュ・フランセ関西にて催された講演会「関西日仏学館竣工八〇周年記念「八〇年に渡る日仏交流」」での講演の内容である。

2 Lettre de Claudel à Kijima Kôzô du 26 juillet 1926, Maison franco-japonaise, archives du bureau japonais.

3 Archives du Ministère des Affaires étrangères (MAE), Claudel à MAE, 3 juin 1924.

4 Archives du MAE, Claudel à MAE, 14 octobre 1926.

5 Archives du MAE, Hauchecorne à MAE, 19 juillet 1936.

6 *Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto. Documents pour servir à l'histoire des relations culturelles franco-japonaises*, Kyoto, Société de Rapprochement intellectuel franco-japonais, 1937, p. 2.（訳者註――同書は日仏二か国語で書かれており、ここに引用されたマルシャンの文章にも日本語対訳が付されているが、本稿ではそれに拠らず、仏語原文から改めて訳し直すことをお許し願いたい。以下の本書からの引用も同様である。）

7 Archives du MAE. Claudel à MAE, 17 décembre 1923.

8 Archives du MAE, De Lens à MAE, 1er février 1933.

9 Archives du MAE, Marchand à MAE, 19 juin 1934.

10 Archives du MAE, De Lens à MAE, 1er février 1933.

11 Archives du MAE, Claudel à MAE, 28 mars 1922.

12 ドイツ語の名称は「*Japanisch-Deutsche Forschungsinstitut*」。

13 ハンス・エッカート（Hans Eckardt, 1905–1969）。

14 *Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto*, *op. cit.*, p. 17.

15 Archives du MAE, Inabata à Marx, 5 novembre 1934.

16 Archives du MAE, *Rapport annuel sur l'activité de l'Institut franco-japonais du Kansai du 1er avril 1934 au 31 mars 1935*, Kyoto, avril 1935, p. 7.

17 Archives du MAE, Hauchecorne à MAE, 19 juillet 1936.

18 *Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto, op. cit.*, p. 25.

19 この点については、本冊子所収の続編「動乱の時代の関西日仏学館（一九四〇～一九四五）」を参照。

20 同右。

21 大阪毎日新聞、一九三六年一月一六日。

京（みやこ）にフランスあり！

アンスティチュ・フランセ関西（関西日仏学館）の草創期

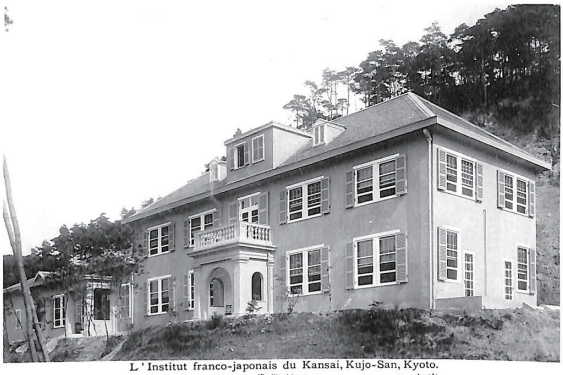
資料アルバム

＊撮影年を特定できる写真資料については（ ）内にそれを記す。〔 〕内には当該資料の所蔵先を示すが、表示のないものはすべてアンスティチュ・フランセ関西蔵（ただしその一部は宮本家、ラ・クルヌーヴ館にも重複して所蔵されている）。「ラ・クルヌーヴ館」と略記されるのは、ラ・クルヌーヴ外交文書センター（Centre des Archives diplomatiques de la Courneuve）のこと。同センターは、同じくフランス外務省の文書資料館であるナント外交文書センターと並び、関西日仏学館に関連する資料を最も豊富に保存する施設である。

ポール・クローデル

稲畑 勝太郎

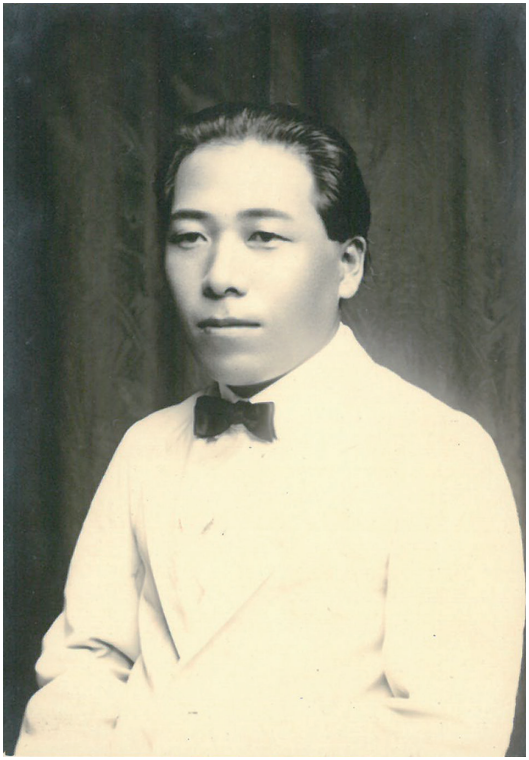
関西日仏学館（九条山）外観（1927）



学館前庭での記念写真

前列中央に初代館長フランシス・リュエラン（在任：1927-30）

〔宮本家所蔵〕



宮本正清（1927）

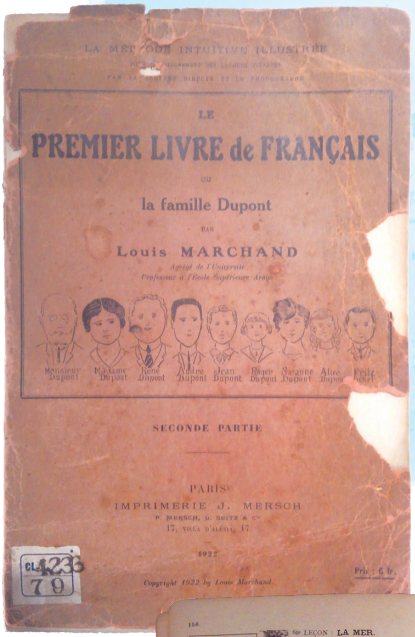
学館設立当初からその運営・教育に尽力した

〔宮本家所蔵〕

F・リュエラン（後列左から2人目）と
リュエラン夫人（前列右から2人目）（1929）
〔宮本家所蔵〕

関西日仏学館学友会ピクニック（1931）
前列中央に第2代館長ジョルジュ・ボノー
〔同〕

第3代館長 ルイ・マルシャン

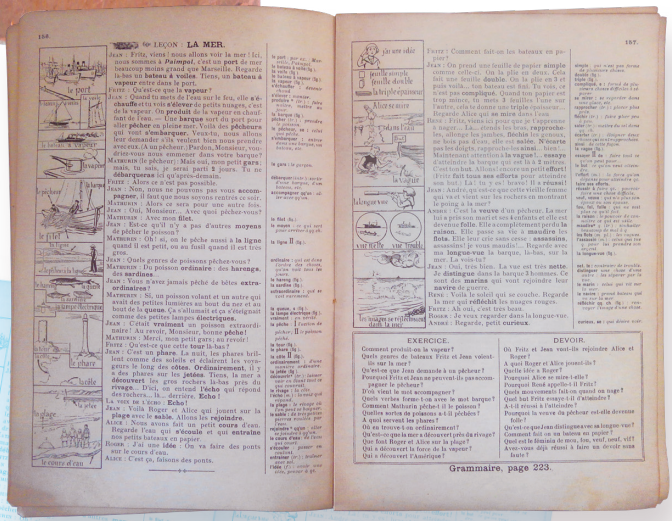


L・マルシャン著

『初等フランス語―デュポン一家』(1920)

表紙

〔京都大学吉田南総合図書館所蔵〕



同書「海」のページ

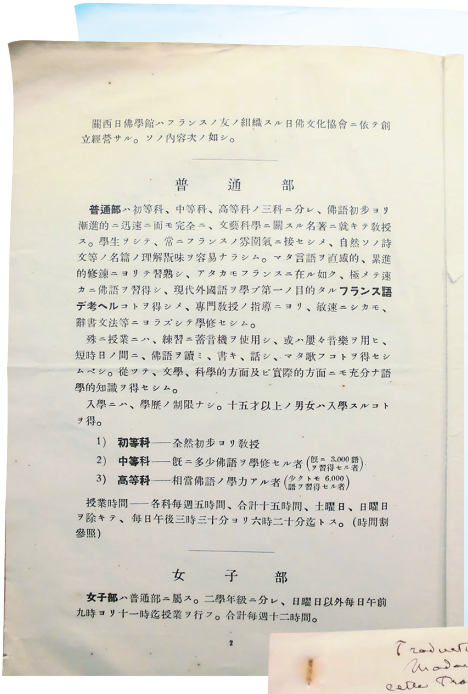
学館前庭で催された宴の様子（1932）

〔ラ・クルヌーヴ館所蔵〕

学館食堂で催された宴の様子（1932?）

画面中央にL・マルシャン、手前に宮本正清

〔宮本家所蔵〕



關西日佛學館ハフランスノ友ノ組織スル日佛文化協會ニ依テ創立經營サル。ソノ内容次ノ如シ。

普　通　部

普通部ハ初等科、中等科、高等科ノ三科ニ分レ、佛語初歩ヨリ漸進的ニ迅速ニ而モ完全ニ、文藝科學ニ關スル名著ニ就キテ教授ス。學生ヲシテ、常ニフランスノ雰圍氣ニ接セシメ、自然ソノ詩文等ノ名篇ノ理解旨味ヲ容易ナラシム。マタ言語ヲ直感的、累進的修練ニヨリテ習熟シ、アタカモフランスニ在ル如ク、極メテ速カニ佛語ヲ習得シ、現代外國語ヲ學ブ第一ノ目的タル**フランス語デ考ヘル**コトヲ得シメ、專門教授ノ指導ニヨリ、敏速ニシカモ、辭書文法等ニヨラズシテ學修セシム。

殊ニ授業ニハ、練習ニ蓄音機ヲ使用シ、或ハ屢々音樂ヲ用ヒ、短時日ノ間ニ、佛語ヲ讀ミ、書キ、話シ、マタ歌フコトヲ得セシムベシ。從テ、文學、科學的方面及ビ實際的方面ニモ充分ナ語學的知識ヲ得セシム。

入學ニハ、學歴ノ制限ナシ。十五才以上ノ男女ハ入學スルコトヲ得。

1) **初等科**——全然初歩ヨリ教授
2) **中等科**——既ニ多少佛語ヲ學修セル者（既ニ 3,000 語ヲ習得セル者）
3) **高等科**——相當佛語ノ學力アル者（少クトモ 6,000 語ヲ習得セル者）

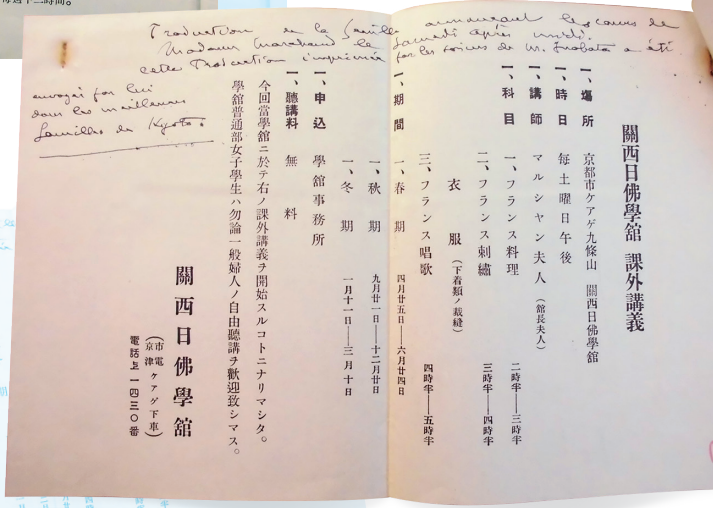
授業時間——各科毎週五時間、合計十五時間、土曜日、日曜日ヲ除キテ、毎日午後三時三十分ヨリ六時二十分迄トス。（時間割參照）

女　子　部

女子部ハ普通部ニ屬ス。二學年級ニ分レ、日曜日以外毎日午前九時ヨリ十一時迄授業ヲ行フ。合計毎週十二時間。

学館学則（1932）

このほかフランス留学を志す生徒のための専門部や公開講義も設けられていた

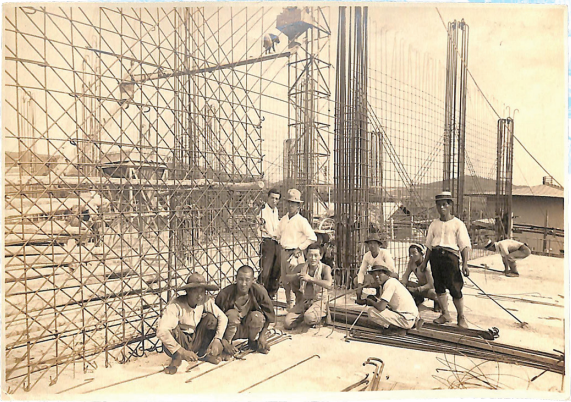


關西日佛學館　課外講義

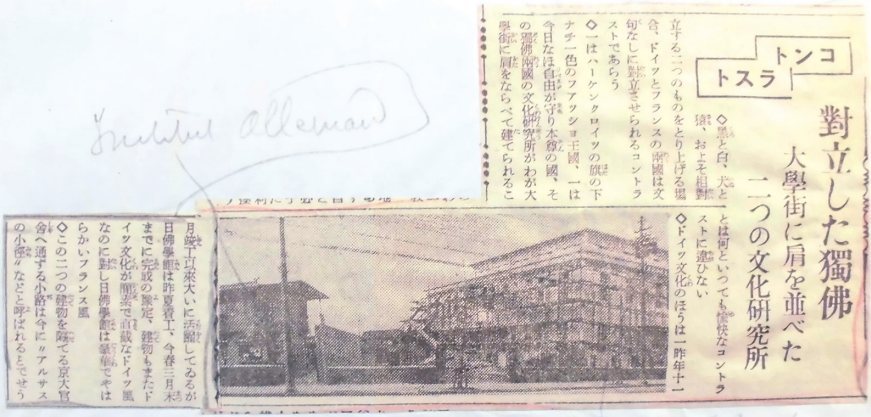
一、場所　京都市ケアゲ九條山　關西日佛學館
一、時日　毎土曜日午後
一、講師　マルシャン夫人（館長夫人）
一、科目　一、フランス料理　二時半——三時半
二、フランス刺繍　三時半——四時半
衣服（下着類／裁縫）
三、フランス唱歌　四時半——五時半
一、期間　一、春期　四月廿五日——六月廿四日
一、秋期　九月廿一日——十二月廿日
一、冬期　一月十一日——三月十日
一、申込　學館事務所
一、聽講料　無料
今回當學館ニ於テ右ノ課外講義ヲ開始スルコトニナリマシタ。
學館普通部女子學生ハ勿論一般婦人ノ自由聽講ヲ歡迎致シマス。
關西日佛學館
（市電京津ケアゲ下車）
電話五一四三〇番

女性向け公開講座

〔ラ・クルヌーヴ館所蔵〕



建設中の関西日仏学館新館（1936）



トンコ
トスラ

對立した獨佛

大學街に肩を並べた二つの文化研究所

◇黒と白、犬と猫、とは何といつても愉快なコントラストに違ひない

◇ドイツ文化のほうは一昨年十一月竣工以來大いに活躍してゐるが日佛學館は昨夏着工、今春三月末までに完成の豫定、建物もまたドイツ文化が簡素で直截なドイツ風なのに對し日佛學館は華麗でそはらかいフランス風

◇この二つの建物を隣でる京大當局へ通ずる小路は今にヴァルサスの小路がなどと呼ばれるようでせう

「對立した獨佛」―1936年1月16日の新聞記事

〔ラ・クルヌーヴ館所蔵〕

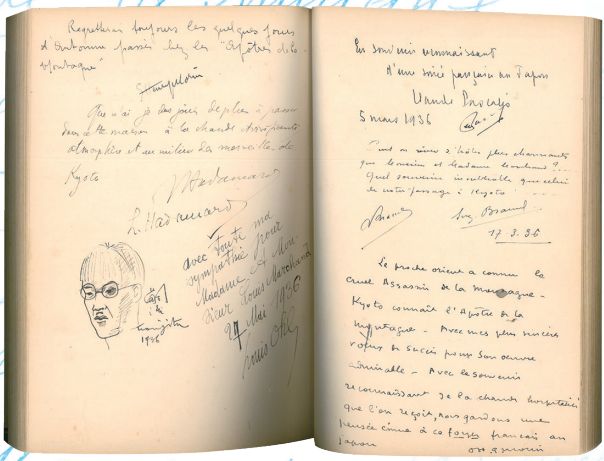
新館竣工（1936）

〔宮本家・ラ・クルヌーヴ館所蔵〕

新館、庭園
（1936）

新館、貴賓室

プレイエル製ピアノ、壁には藤田嗣治「ノルマンディーの春」



新館落成式（1936年5月27日）前後に藤田嗣治が芳名録に描いたデッサン

新館落成式に出席した東久邇宮

落成式当日の昼食会

左京区東一条角から北西を望む（1936）

京都帝国大学の学生たちの向こうに、関西日仏学館新館（右）とドイツ文化研究所（左）

〔京都大学所蔵〕

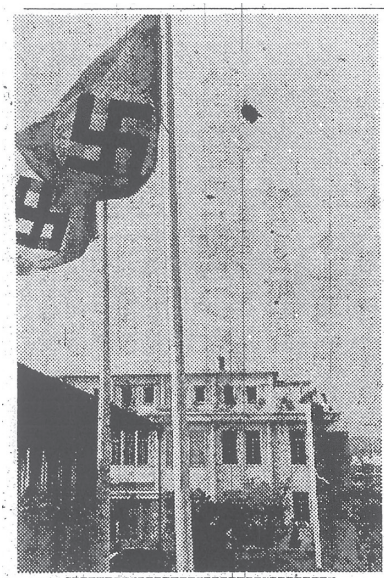
1937年パリ万博 対峙するソ連館（右）とドイツ館（左）（万博記念絵葉書）

努めて隠す戦勝氣分

花やかな笑ひ聲に漂ふぎこちなさ

佛軍降伏と吉田山麓の兩團體

佛軍降伏の報に明けた十八日朝、東一條のドイツ文化研究所の玄關屋上に二本のナチス旗が飜り、北隣りの関西日佛學館の瀟洒な白壁の建物もけふは思ひなしか寂しく、道行く人に轉換する西洋史の一齣を鮮やかに印象させるのだった



ドイツ文化研究所の建物には飜る日佛學館

ドイツ文化研究所を訪ふとエッカルト主事は同研究所の教育顧問に見せるドイツ文化映畫の映寫技師として京大へ講師に行つてゐる在で、後はヒツソリ隠として戦勝氣分といつたものはどこにもない、二十一日午後六時から都ホテルでドイツ大使の招宴が同研究所関係者を中心として開かれるが、「別に祝宴といつたものではなく例年行なる總會の行事に過ぎない」と語り努めて戦勝氣分を出すのを控へてゐるが、當日の朝ナチス旗を掲げるとき「次に掲げるのはロンドンが落ちたとき だ」と不屈のドイツ魂の片影を洩らしたとのはなし……

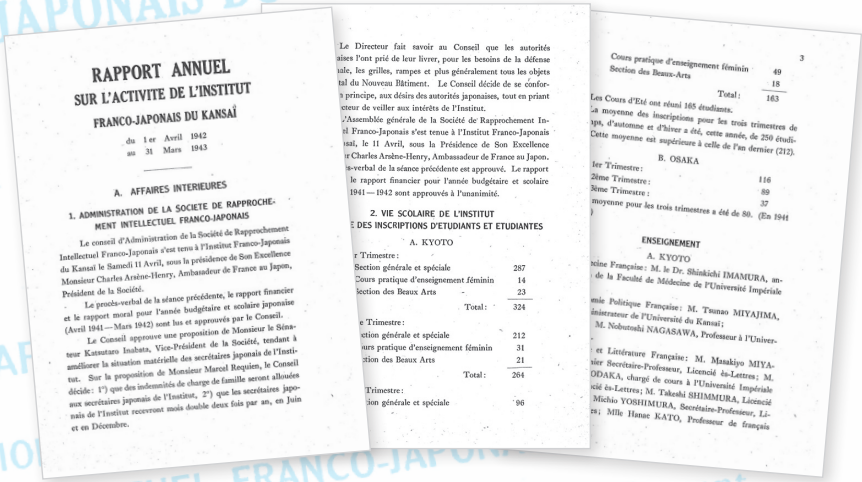
日佛學館を訪れるどこゝも平常と變らずフランス語の教授が行はれ師トから女生徒たちの明るい笑ひ聲が聞えたりするが、心の痛手に暮れ合ふまいとするやうな一種ぎこちない空氣が漂ひ、掲示板の戦況ニュースも十五日以後はプツリと絶えてゐるのも寂しい、正午過ぎ京大名譽教授ポ野直喜博士が訪れてロベール館長に敬問と談話の辭を述べて去つたのと卓者の淋しい心情として強く心を打つたやうだ、訪れた記者に「文化には負けるといふことはありません、今まで通りに文化のためには尽くすのみです」と力強く語るロベール氏の顔には悲痛の色が濃かつた

「努めて隠す戦勝氣分」―1940年6月19日の大阪朝日新聞記事

「医学の進歩へのフランスの貢献」展覧会・講演会（1941）

遠足でのひとコマ（1942）

第４代館長Ｍ・ロベール（最後列左から４人目）、
講師Ｊ=Ｐ・オーシュコルヌ（最前列右端）、宮本正清（同中央）
〔宮本家所蔵〕



RAPPORT ANNUEL
SUR L'ACTIVITE DE L'INSTITUT
FRANCO-JAPONAIS DU KANSAÏ

du 1er Avril 1942
au 31 Mars 1943

A. AFFAIRES INTERIEURES

1. ADMINISTRATION DE LA SOCIETE DE RAPPROCHEMENT INTELLECTUEL FRANCO-JAPONAIS

Le conseil d'Administration de la Société de Rapprochement Intellectuel Franco-Japonais s'est tenu à l'Institut Franco-Japonais du Kansaï le Samedi 11 Avril, sous la présidence de Son Excellence Monsieur Charles Arsène-Henry, Ambassadeur de France au Japon, Président de la Société.

Le procès-verbal de la séance précédente, le rapport financier et le rapport moral pour l'année budgétaire et scolaire japonaise (Avril 1941 — Mars 1942) sont lus et approuvés par le Conseil.

Le Conseil approuve une proposition de Monsieur le Sénateur Katsutaro Inabata, Vice-Président de la Société, tendant à améliorer la situation matérielle des secrétaires japonais de l'Institut. Sur la proposition de Monsieur Marcel Requien, le Conseil décide: 1°) que des indemnités de charge de famille seront allouées aux secrétaires japonais de l'Institut, 2°) que les secrétaires japonais de l'Institut recevront mois double deux fois par an, en Juin et en Décembre.

Le Directeur fait savoir au Conseil que les autorités
aises l'ont prié de leur livrer, pour les besoins de la défense
nale, les grilles, rampes et plus généralement tous les objets
tal du Nouveau Bâtiment. Le Conseil décide de se confor-
principe, aux désirs des autorités japonaises, tout en priant
cteur de veiller aux intérêts de l'Institut.
'Assemblée générale de la Société de Rapprochement In-
el Franco-Japonais s'est tenue à l'Institut Franco-Japonais
nsaï, le 11 Avril, sous la Présidence de Son Excellence
r Charles Arsène-Henry, Ambassadeur de France au Japon.
s-verbal de la séance précédente est approuvé. Le rapport
le rapport financier pour l'année budgétaire et scolaire
1941 — 1942 sont approuvés à l'unanimité.

2. VIE SCOLAIRE DE L'INSTITUT
E DES INSCRIPTIONS D'ETUDIANTS ET ETUDIANTES

A. KYOTO

r Trimestre:

Section générale et spéciale	287
Cours pratique d'enseignement féminin	14
Section des Beaux Arts	23
Total:	324

e Trimestre:

ction générale et spéciale	212
urs pratique d'enseignement féminin	31
ction des Beaux Arts	21
Total:	264

Trimestre:

ion générale et spéciale	96
Cours pratique d'enseignement féminin	49
Section des Beaux-Arts	18
Total:	163

Les Cours d'Été ont réuni 165 étudiants.
e moyenne des inscriptions pour les trois trimestres de
pn, d'automne et d'hiver a été, cette année, de 250 étudi-
Cette moyenne est supérieure à celle de l'an dernier (212).

B. OSAKA

1er Trimestre:
2ème Trimestre: 116
3ème Trimestre: 89
moyenne pour les trois trimestres a été de 80. (En 1941
)

ENSEIGNEMENT

A. KYOTO

ecine Française: M. le Dr. Shinkichi IMAMURA, an-
de la Faculté de Médecine de l'Université Impériale

omie Politique Française: M. Tsunao MIYAJIMA,
ésinérateur de l'Université du Kansaï;
M. Nobutoshi NAGASAWA, Professeur à l'Univer-

et Littérature Française: M. Masakiyo MIYA-
ier Secrétaire-Professeur, Licencié ès-Lettres; M.
ODAKA, chargé de cours à l'Université Impériale
cié ès-Lettres; M. Takeshi SHIMMURA, Licencié
Michio YOSHIMURA, Secrétaire-Professeur, Li-
es; Mlle Hanae KATO, Professeur de français

CONFERENCES

7 Avril 1942 — M. Marcel Robert:
Guillaume Apollinaire
19 Mai 1942 — M. Marcel Robert:
Quelques maîtres de la musique française moderne:
César Franck (avec audition de disques)
16 Juin 1942 — M. Takeo Kuwabara:
La Princesse de Clèves.

CONCERTS

9 Avril 1942 — Récital de piano de son Excellence
Madame Charles Arsène-Henry:
Daquin, Rameau, Franck, Debussy, Ravel
12 Novembre 1942 — Récital de piano de Mlle Kazuko Kusama:
Chopin, Debussy, Fauré, Ravel.
22 Novembre 1942 — Récital de chant de Mlle Chizuko Asano,
avec le concours de Mme Misao Ishimoto:
Duparc, Fauré, Debussy.

1942年度の学館事業報告（1943）

戦時中にもかかわらず、多くの生徒が受講登録し（1学期324人、2学期264人、3学期163人とある）、多様な文化活動が展開されていた

終戦間際の学館接収に関する覚え書（1945）

覺書

一京都市左京区吉田泉殿町八番地財團法人日佛文化協會
會内所有家具器具其他運搬費三千貳百圓御支拂ノ
金壹千五百圓也ハ株式會社ニ於テ負擔可致ニテ
一財團法人日佛文化協會事務所移轉先ハ
京都市左京区北白川上終町十拾八番地
ノ旅館ニ賃貸ニ於テ旅費御支拂ハ株式會社ニ於テ
其半額ハ負擔可致ニテ
但シ財團法人日佛文化協會内ニ於テ貳部ハ現在御使用中ノ
電話ハ四月末迄當ハ株式會社ニ於テ使用可致ニテ
右為後日一札如件
昭和拾九年四月拾五日
株式會社 島津製作所
京都市中京区四条河原町八番地
株式會社 島津製作所
工場事業所 [illegible] 誌涼 吉
財團法人日佛文化協會
理事 福畑太郎殿

Cours Supérieur 15
Cours Moyen 43
Cours Elémentaire 186
Total :

Renonçant provi
ciaux ", nous avons porté not
importants - de langue et lit

PERSONNEL

M. Marcel ROBERT, Agrégé d
l'Insti
M. Masakiyo MIYAMOTO, Licencié ès-Lettres ; 1er. Secrétaire
de l'Institut .
M. Jean-Pierre HAUCHECORNE, Ancien Chargé de Cours au Troisième Lycée Supérieur de Kyoto .
M. Cardon de MONTIGNY, Chargé de Cours à l'Université Impériale de Kyoto .
M. Vincent POULIOT, Licencié de l'Université de Montréal, M. A. de l'Université d'Oxford .
M. Hiysayuki OMODAKA, Licencié ès-Lettres ; ancien Boursier du Gouvernement Français ; Chargé de Cours à l'Université Impériale d'Osaka .
M. Nobuhisa NAGASAWA, Licencié ès-Lettres ; Professeur à l'Université Ryokoku .
M. YASUI, Licencié ès-Lettres .
Mme. Jean-Pierre HAUCHECORNE, Secrétaire de l'Institut .

Cours Supérieur 15
Cours Moyen 43
Cours Elémentaire 186
Total : 244

1945年度事業報告（1946）

戦後まもない1946年1月に再開された学館の受講登録数は、244名に上った

現在のアンスティチュ・フランセ関西

1992年、九条山の旧館跡地に建てられたヴィラ九条山

動乱の時代の関西日仏学館（一九四〇～一九四五）

ミッシェル・ワッセルマン
立木　康介　訳

自分がかつて八年間も暮らしたこの建物のなかでお話するとき、私はいつも胸が熱くなります。[1] 私はこの建物に住んだ最後の本学館館長でした。このすばらしい学館の館長を務めたこと、そしてヴィラ九条山と京都フランス音楽アカデミーの創設に本学館館長としてかかわった経験の大きさが、私のうちにとくに大切な思い出を呼び覚ますことは、申し上げるまでもありません。

そのようなわけで、立木康介氏と彼が率いる若き研究者たちのチームに私がいかに好意を抱き、彼らがフランス外交文書センターに収集しに出かけた貴重な資料に私がどのような関心を寄せているか、みなさんにもお分かりいただけるでしょう。今日、ラ・クルヌーヴとナントの二つのセンターに収蔵されているこれらの資料から、私は本学館の歴史について多くのことを学びました。とりわけ、「新館」の建設について私が昨年六月にこの同じ場所で行った講演[2]の準備は、これらの資料がなければたいへん困難だったにちがいありません。

第二次世界大戦という苦難の時期の学館について私がここでお話しするというのは、もともと立木氏のアイデアでした。私がこの歴史を語るに最もふさわしい人物であると、彼が考えてくれたのです。事実、大戦期の学館というテーマにはつねに興味を抱いてきましたので、こうして与えられた機会にそれをより悉に調べることができたことを嬉しく思います。ところが、ことこの苦悩の時代にかんして、私たちの手にしている資料がじゅうぶんに満足のいくものであるかというと、それは定かではありません。よろしければ、これらの資料を枚挙することからはじめましょう。

まず、クローデルが駐日大使であった時代に創設された二カ国財団「日仏文化協会」の年次活動報告書が

あります。同協会は長らく本学館の法的後見人の役を務めてきましたが、近年、その役は、海外文化活動にかかわるフランス外務省の拠点、アンスティチュ・フランセの手に引き継がれました。この年次活動報告書は、私たちが扱う時代（一九四〇～四五年）については各年揃っていますが、残念ながら、韜晦的であったり中身のないことを述べていたりすることがしばしばで、そうでない場合には、毎年同じ空疎なお役所表現を一字一句違わず繰りかえしているにすぎません。

それよりずっと多くのことを教えてくれるのは、「関西日仏学館活動概要報告書一九三六～一九四六」と題された資料です。こちらはより個人的なリポートであり、戦後に完全な自由のもとで書かれただけあって、情報量も豊富です。しかし残念ながら、外交文書センターに保存されているヴァージョンは、一九四二～四三年度の記録が書かれた最初の数頁以降が失われており、その理由は不明です。そのため、この文書からは、戦時中の最後の三年間の情報が得られません。

最も活き活きとしていて、最も情報に富んでいるのは、かつて私を驚かせたテクストです。実際、その文書は本学館のアーカイヴに含まれていて、私は、言ってみれば、その文書とともに寝起きしていたことになります。それは、本学館のレジェンドといってよい人物、ジャン＝ピエール・オーシュコルヌが、個人的に利用する目的で一九五六年に書いた文書です。オーシュコルヌは、国民教育省の制度に則る地位を得ようと、フランス政府に度々願い出ましたが、その何度目かの申請の際にこの文書を提出したのです。クローデルの時代の在神戸フランス領事アルマン・オーシュコルヌの息子であるジャン＝ピエール・オーシュコルヌは、一九三八年から常勤職員として本学館に雇われ、講師として教鞭を執ると同時に、事実上の副館長の職

責も果たしました。それゆえ、オーシュコルヌは本学館において戦争を経験したのであり、とりわけ、一九四五年度がはじまる四月、帝国陸軍向け精密機器の工場を設置するために、本学館が日本政府に接収されたドラマティックな時期については、感情のこもった力強い記述を残しています。オーシュコルヌと、本学館事務局長の宮本正清は、このとき特別高等警察により収監され、飢餓状態に置かれるとともに、暴行も受けました。

以上が私たちの手にしている資料のすべてであり、与えられた主題の重要性を考えれば、実のところ手厚いとはいえません。というのも戦争、とりわけ二〇世紀を血で染めることになった二つの大戦の間中フランスとドイツを対峙させた戦争は、よく考えてみれば本学館から、敢えていうなら本学館の性格や機能から、つまりそれが構想された理由から、けっして遠く離れた出来事ではなかったからです。クローデルが一九二四年に東京の日仏会館を、その三年後に関西日仏学館を創設したのは、実際、この新任の駐日フランス大使が外務省から授かったミッション、すなわち、一九一八年のドイツ帝国敗戦後も変化がなかった、日本の教育界・文化界におけるドイツの隆盛にたいして、フランス語教育の発展と日仏の文化融合によって決然と闘うというミッションの一環をなす事業だったのです。我等の「かつての敵は、この間にただ我等の競争相手になったにすぎません」[3]と、クローデルは書いています（そしてその後、ヒトラー政権が誕生するに及んで、ドイツは元の地位、すなわち「敵」の地位に戻ることになります）。それゆえ、爾後はドイツにたいして、今日の言葉でいう「ソフト・パワー」を対峙させるのがよいでしょう、と。このソフト・パワーは、二〇世紀初頭においては、文化プロパガンダ活動をコーディネイトする「海外事業部」がフランス外務省に

設置されたこと、そしてまた、世界中にアリアンス・フランセーズ及びフランス文化センターの緊密なネットワークが構築されたことのうちに、見てとることができます。

京都において、この仏独競合は、一九三〇年代、特段に目を惹くかたちで露わになりました。二つの強国は、京都大学を目の前にした四〇〇〇平方メートルの土地を争ったのです（その結果はよくも悪くも引き分けに終わりました）。一九三二年に本学館第三代館長に就任したルイ・マルシャンは、外国語としてのフランス語の教育を長年実践してきた経験から、一九二七年に本学館の建てられた九条山が、京都市の中心から外れ、交通の便も悪いために、本学館は目立たぬ存在であることを余儀なくされている、とたちまちこう確信するに至ります。曰く、「大学街から遠く、アクセスしにくいうえ、階段やら坂やらを登らねばならないという条件が合わさって、学生たちが近寄らなくなっているように見えました」[4]と。そこでマルシャンは、京都大学の目の前の、最近空き地になったばかりの国有地、すなわち、私たちがいまいるこの土地に目をつけ、そこに分館を建築する意義があるという自らの確信を、稲畑勝太郎に共有してもらうことに成功しました。稲畑勝太郎とは、関西の財界に働きかけて九条山の校舎建設の資金集めの指揮を執った親仏家（で完璧な仏語話者）の大実業家です。ところが、時を同じくして、なんとワイマール共和国のドイツ人たちも、新設予定の「ドイツ文化研究所」の用地を求めて、この同じ土地を譲ってほしいと日本政府にもちかけ、困った日本政府は、ソロモンの判決よろしく、正確に半分ずつの土地を両者に与えることで問題を落着させました。すなわち、一筋の路地を挟んで、北側をフランスに、南側をドイツに売却したのです。二つの敷地を分割するこの路地は、今日も残っています。

用地が決まれば、次には建設を行わねばなりません。マルシャンは、日本側の出資者たちが僅か数年前に合意してくれた九条山の学館建設のための莫大な投資を無駄にするのを憚り、慎重を期して、当座は授業を行う場所を提供するだけの木造校舎を建設し、学館のその他の機能（図書室、文化活動、館長宿舎）は九条山に残すことでよしとすることを提案しました。ところが、そうこうするあいだに、ヒトラーが政権を奪い、ドイツ研究所は一九三四年にオープンしてしまいます。名高い日本研究者である初代館長ハンス・エッカートは、その前年にナチに入党していました。すると、早くも三四年四月一〇日の日仏文化協会理事会において、マルシャンは、このような状況下で競争相手よりも下手なものを作るわけにはいかないと述べ、鉄筋コンクリートの学舎を建設し、それをイデオロギー闘争に投入するという案を打ち出します。その学舎は、他でもなく「世界にフランスが占める座」を例証するという明示的なミッションをもつだろう、というのも、この世界のなかで、フランスは「ヒューマニティ、連帯、普遍的同胞愛といった心情」を際立たせるのであり、実際、フランスは「肌の色や人種にかかわる偏見」[5]に無縁であるのだから、と。

おそらくこの競争に闘志を掻きたてられたのでしょう、稲畑は新館の建設に一〇年前よりもいっそう熱意をもってかかわり、早くも一九三四年一一月に、パリの海外事業部部長に向けて、「すでに存在しているお隣の建物よりもっと立派な建物」[6]を建てるつもりであると請け合っています。日仏学館の学舎の設計は、鉄筋コンクリートの伝道師と呼ばれたオーギュスト・ペレのフランス人の弟子レイモン・メストラレに託され、こうして三六年五月に竣工した新学舎は、構想にいっそうのまとまりがあった点でも、箱の大きさの点でも、新古典主義様式の建築の美しさという点でも、ドイツ文化研究所の建物を凌ぐものでした。それを目

にした京都市民は好奇心を掻きたてられ、敵対するこの二つの国の文化センターが闘鶏のように向き合って身構えるのを、面白がって見ていました。三七年の万国博覧会の折にナチス・ドイツとソヴィエト連邦が建設したパヴィリオン同士の記憶に残る対決を目にして、パリ市民たちが抱くことになる感覚に似たものを、京都の人々はパリ市民たちに一年先んじて体験したというわけです。

以上のような独特の文脈に、この四年後、学館における第二次世界大戦という主題が書き込まれることになります。つまり、この文脈が背景にあるからこそ、枢軸国のひとつであり、しかも（一九四〇年九月には）仏領インドシナ北部を占拠するに至った日本において、フランスの文化インスティチュートの誇り高き建物が、フランスに残りうる僅かな自信の欠片でもって、ドイツの建物を、すなわちフランス本土を占領し、傀儡政権を介してフランスを統治している国の建物を、睥睨する、という状況が生まれたのです。日本はこの点において特異な例外でした。ドイツやオーストリア、イタリアでは、フランスの文化施設（さらにはヴィラ・メディシスやローマ・フランス学院）が次々と閉鎖されていきました。これにたいして、東京の日仏会館および京都の日仏学館は、業務を縮小したとはいえ、一九四四～四五年度の学年末（三月三一日）まで、どうにかこうにか機能し続けるのです。たしかに、京都では、倹約のためただちに活動の規模を縮小する必要がありました。一九四〇年九月には専門講義の大半を畳み、講師陣の頭数を二二人から一〇人にまで減らさざるをえませんでした。にもかかわらず、講演会やコンサートの開催頻度は一定程度を保ち続け、しかも四一年一月末には「医学の進歩へのフランスの貢献」をテーマにした展覧会が開かれます。[7] そのセノグラフィーを手がけたのは、当時日本政府のもとで装飾芸術の顧問を務めていた偉大な建築家シャルロット・ペ

リアンでした。医学関連の五つの講演によっても飾られたこのイベントは、たいへん盛況だったらしく、「関西日仏学館活動概要報告書一九三六〜一九四六」を書いた匿名の筆者（ジャン＝ピエール・オーシュコルヌである可能性が高い）によれば、「ドイツ文化研究所は日本政府にたいし、「ヨーロッパ共栄圏」においてフランスが甘んじなくてはならない卑しい隷属状態と相容れぬ知的活力をもったイベントを中止させるよう、公式に申し入れた」[8]ほどでした。時局の大きな困難にもかかわらず、フランス政府から定期的な補助を受けていた本学館は、インドシナ総督府からの特別給付金を利用して、さらに、ある電気専門学校の敷地内に、大阪分校を開校することすらできました。パール・ハーバーと国民総動員にもかかわらず、学館の授業に登録する生徒数は、四五年三月まで満足のいく水準を保ち続けました。ただしその一方で、館長マルセル・ロベールと、どんなときにも献身を忘れないジャン＝ピエール・オーシュコルヌは、フランス本土から訪れる講演者が途絶えた穴を埋めるため、講演に講演を重ねました。ところで、本学館の文化プログラム構成において、音楽は、本学館がプレイエル製のピアノを所有していたことからも分かるとおり、知的協働に次ぐ第二の軸となっていました。今日、世界一音楽好きの国と言われる日本（戦争直前の時期を通じて、クラシック音楽のレコードを最も多く輸入した国も日本でした）は、すでに西洋音楽の技法をじゅうぶん習得しており、それに付随してフランスのレパートリーにも通じていたので、現地の演奏家や歌手が登場する一定レベルのリサイタルやコンサートを戦時中もずっと続けることができたのです。

戦時の不自由さは、とにもかくにも、それ自身の掟を課さずにはおきません。マルシャンが「教育機関というだけでなく、さらに美の集積地、フランス美術の常設展示」[9]とすることを望んだ学館の美しいアール・

デコ調内装などを、そうした掟が気にかけてくれるはずはありません。一九四二年四月一一日、マルセル・ロベールが理事会で報告したところによると、「国防の必要から、鉄格子やランプ、そして広く新館の金属製品すべてを供出するようにと、日本政府から申し入れがあった」[10]といいます。こうして多くの装飾品を失った新館、すなわち現在の本学館の建物は、この取り返しのつかない損壊をその後もけっして元に戻すことができませんでした。

一九四四年、パリが解放されると、本学館をめぐる政治状況はとうとう根本的に一変してしまいます。フランスはもはや、ナチ帝国に隷属する国、それゆえ戦争中も比較的手心を加えられ、「学館は引き続き日本政府と最良の関係を維持した」と年次報告書が儀礼的に繰りかえしもする、そうした国ではなく、打ち倒すべき敵になったのです。実際、その手はじめに、一九四五年三月、日本は、それまで戦時の大半の期間、ヴィシー行政の上に胡座をかくというしかたで事実上占領していたインドシナを、いきなり手中に収めます。京都では、本学館は新年度のはじまる四月に日本政府に接収され、島津製作所が経営する軍事用精密機器工場がこの場所に設置されました。といっても、それはたんなる財産没収ではありませんでした。しかるべき手続きを踏み、借り主が契約期間終了後に建物を原状回復する義務を負うという、学館にとって比較的有利な条件で、一年間貸し出されたのです。その間、ロベールとオーシュコルヌは、たった一台の手押し車を牛に引かせて、吉田新館の家具調度から教材、一万冊にも及ぶ図書館の蔵書まで、九条山に移転させる作業を敢行しました。九条山を一度でも訪れ、あの上り坂の最後のほうの急勾配を経験したことのある方には、この二人のフランス人が自分たちに課した試練がいかほどのものであったかお判りいただけるはずです。三月か

ら五月にかけて、二人は毎日二往復（牛の労力に配慮して徒歩で、しかも自分たちも頂上まで荷物を背負って）を欠かしませんでした。食料の配給がどんどん覚束なくなるにつれて、その作業がますます過酷になっていったことはいうまでもありません。

六月、オーシュコルヌと学館事務局長・宮本正清は特別高等警察に逮捕され、収監されて、暴力的な取り調べを受けます。この収監の理由は明らかではありません。もしかすると、国家の安全を脅かす陰謀の中心にこの二人がおり、学館がその陰謀の軸を担っているといった嫌疑がかけられたか、あるいは、プロパガンダ目的で二人をそのような人物に仕立て上げることが目論まれたのかもしれません。独房でも手錠を解かれることがなかったというオーシュコルヌは、上述の一九五六年の文書で、共謀者とされる人々の名前を言えと求められ、食事も与えられず、殴られ、殺すぞと脅されたことを告白しつつ、彼が「拷問者たち」と名指す人々から受けた「虐待や脅迫」[11]に屈しなかったこと、当局が彼に確認するよう求めたいわゆる共謀者のリストを正しいと請け合うのを拒否し続けたことを、誇らしげに語っています。

オーシュコルヌは一九四五年八月一七日、すなわち終戦の二日後に、衰弱した状態で釈放され、米軍病院で手当を受けました。しかしその後、早くも一〇月一五日には、マルセル・ロベール館長とともに、本学館の業務再開に向けて動き出します。当時、建物は惨憺たる状態におかれていました。オーシュコルヌの記述に耳を傾けてみましょう。「セントラルヒーターの放熱器を除いて、建物の金属部分はすべて引き剥がされてしまっていた。大階段の鉄製ランプも完全に姿を消していた。二つの階段のステップを飾っていた銅製の帯、さらには扉を飾っていた数々の鉄工芸品も同様だった。窓ガラスの半分は消失しているか、もしくは割

れてしまっていた。図書館の書架という書架がなくなっていた。床板の一部は剥ぎとられていた。トイレの水洗装置も動かなくなっていた。などなど。」[12]

緊急の修繕に踏み切り、教材と家具調度の引越を以前とは逆方向に、しかし以前よりは整った装備で、行う必要がありました。その一方で、九条山はそれ以後再び休眠状態に入ります。それは四〇年続き、フランス外務省当局ですら九条山の存在を忘れかけていたほどです。ところが、廃墟と化した旧館の危険性を訴える近隣住民のたえまない抗議を受け、一九八一年、この建物は取り壊されるに至ります。逆説的にも、このことが九条山を救い、その信じられないような再生に道を拓きました。日仏文化協会は、解体作業の費用を稲畑産業に立て替えてもらっていたので、その負債を解消するために土地を売却することを決断します。一九八六年、条件に見合う買い手が見つかったため、売却の意思をフランス側に伝えたところ、フランス側は調査団を派遣し、売却は非生産的であると判断するに至ります。すると両者は、芸術家を逗留させるレジデンス「ヴィラ九条山」を、過去の二つの建物に適用されてきたクローデル方式、すなわち、「器」（建物の建造）は日本、「中身」（運営にかかわる費用の負担）はフランスという方式をここでも採用しつつ、建設することで合意しました。フランスに尽くしての一世紀にわたるメセナ事業にここでも忠実に、稲畑勝太郎の孫で、祖父が創業したファミリー企業の社長（当時）を務める勝雄氏が、資金調達の先頭に立ち、このときには京都市および京都府も関西財界に力を貸してくれました。このような善意の結合によって、ヴィラ九条山は一九九二年にオープンすることができました。

吉田では、早くも一九四五年の年末から授業が再開されました。それはアメリカ占領軍向けの授業で、当

初は本学館にて、次いで、本学館に暖房が入らなかったため、「セントラル・アーミー・スクール」にて行われました。本学館の通常授業も、一九四六年一月一〇日に再開されました。建物にはまだ暖房が入らないままでしたが、フランス語、フランス文学、ラテン語の授業のみが開講された冬学期に、延べ二四四人に上る受講登録がありました。この数字は翌年四月からの学期には二倍に跳ね上がります。

戦争が終わると、本学館の二つの建物の相次ぐ建設を気前よく、かつ決定的なしかたで支えてくれた一方で、自らの企業が軍と協力関係にあった稲畑勝太郎は、心中穏やかでない状態に置かれたようです。というのも、稲畑が起こした染織会社は、日露戦争以来、帝国陸軍制服のカーキー染めにかかわってきたからです。本学館の資料のなかに、一九四六年三月の日付をもつある文書の写しが残されています。書き手の名前が分かりませんが（おそらくロベール館長でしょう）、フランス総領事に宛てて、「貴族院議員、レジオン・ドヌール勲章グラントフィシエ級、稲畑勝太郎氏」が、「彼がこれまでつねにフランスの忠実な友人であり、私たちの関西日仏学館の創設者のひとりでもあった」ことに鑑み、「彼の身に「困難」が生じたときには、〔総領事の〕お力にお縋りできたらありがたいと願っている」[13]ことを伝える内容になっています。稲畑は同じく、五月末の郵便でも、新たに赴任したフランス大使（より正確には、連合軍総司令官マッカーサーとフランスの連携を図る任務の長官）ペシュコフ将軍に私信を書き、「フランスにたいして私が抱いている愛着の堅固さと重みは一度たりとも揺らいだことがない」[14]ことを伝える考えであると述べています。老稲畑はこのとき八四歳でした。彼の身に起こりえた困難が、あと三年に迫った彼の余命に暗い影を落とさなかったことを願うばかりです。

最後にひとつ個人的な思い出をお話しましょう。一九七九年、若き日本研究者だった私は、コレージュ・ド・フランスで催された「日本学」についてのコロークに参加しました。フランスで日本の伝統芸能をテーマになされた研究を総括することが、そのコロークでの私の役目であり、実際私が日本に惹きつけられてきたのはこの領域においてでした。クロード・レヴィ＝ストロースや加藤周一といった大御所を前にして、緊張で震えながら発表したのを覚えています。コロークのあと、出席者たちは会場近くのカフェで喉を潤したのですが、私はそこでジャン＝ピエール・オーシュコルヌその人に出会いました。彼と顔を合わせたのは、私の人生で後にも先にもそのときだけです。当時、オーシュコルヌは七〇歳くらいだったでしょうか、引退してモンペリエのほうに居を移したばかりでした。ただちに好感を抱かせる人物であり、すばらしく話し上手で、しかも休みなくいつまでも話し続けました。戦争中の京都の日仏学館について話してくれた彼の言葉は、強く印象に残り、私の記憶に刻みつけられました。そのとき彼が作り話をしたとは思えないし、そんなことをしても何の得にもならなかったはずです。こういう話題で嘘をつく人がいるでしょうか。しかもこんな話をでっち上げることができるものでしょうか。オーシュコルヌの話によると、終戦前の何か月間かを獄中で過ごしたとき、彼ら囚人に与えられたのは一日に一個のお結びだけでした。同じ憂き目にあった仲間たちは、お結びが配られるとすぐにそれに飛びつき、次々に栄養不良で亡くなっていきました。オーシュコルヌが言うには、彼が肉体的にも精神的にも生き延びることができたのは、日々の唯一の楽しみを長続きさせようと、自らを責めさいなむ空腹にもかかわらず、強いてお結びのお米を一粒一粒口に運んだからでした。これほどの自制心を働かせることができたのは、よほど強靱な魂の持ち主だったからにちがいありません。

みなさん、どうぞこの並外れた精神力を思い出し、私自身がそうしたようにこの逸話を大切に記憶に留めながら、それがけっして失われることのないよう、みなさんの周りの方々に伝えていってください。人間存在というものについて、清濁ともに、これほど雄弁に語ってくれる逸話はありません。ご静聴ありがとうございました。

1 本編は、二〇一七年一〇月二八日、アンスティチュ・フランセ関西創立九〇周年を記念して同学館にて催されたシンポジウム「京（みやこ）にフランスあり！――アンスティチュ・フランセ関西の歴史と記憶――」での講演の内容である。

2 本冊子所収「九条山から吉田へ」。

3 Archives du Ministère des Affaires étrangères (MAE), Claudel à MAE, 28 mars 1922.

4 *Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto – Documents pour servir à l'histoire des relations culturelles franco-japonaises*, Kyoto, Société de Rapprochement intellectuel franco-japonais, 1937, p. 2.

5 *Ibid.*, p. 17.

6 Archives du MAE, Inabata à Marx, 5 novembre 1934.

7 Archives du MAE, "Rapport annuel sur l'activité de l'Institut franco-japonais du Kansai du 1er avril 1940 au 31 mars 1941", avril 1941, p. 8.

8 Archives du MAE, "Rapport récapitulatif sur les activités de l'Institut franco-japonais du Kansai, Kyoto, Japon, 1936–1946", p. 22.

9 *Le nouvel Institut franco-japonais de Kyoto*, *op. cit.*, p. 25.

10 Archives du MAE, "Rapport annuel sur l'activité de l'Institut franco-japonais du Kansai du 1er avril 1942 au 31 mars 1943", avril 1943, p. 2.

11 Jean-Pierre Hauchecorne à Ambassadeur de France au Japon (Services culturels), 21 mars 1956, Archives de l'Institut français du Japon-Kansai.

12 *Ibid.*

13 Anonyme à Consul Général de France (Directeur de l'Institut franco-japonais du Kansai ?), 19 mars 1946, Archives de l'Institut français du Japon-Kansai.

14 Archives du MAE, Inabata à Pechkoff, 31 mai 1946.

あとがき

本冊子は、京都大学人文科学研究所（人文研）とアンスティチュ・フランセ関西の共同作業により編まれ、平成三〇年度国立大学改革強化推進補助金により刊行された。

みやこの学術資源研究・活用プロジェクト「京都における日欧交流史の初期調査」は、はじめに述べたように、アンスティチュ・フランセ関西にかんする歴史資料のコーパスをほぼ確定しつつある。今後は、第二次世界大戦後の関西日仏学館の活動を視野に収めつつ、すでに本プロジェクトにかかわってくれたメンバーや、これから私たちのパートナーとなる研究者ひとりひとりの関心の赴くまま、個別のテーマに沿っていくつもの枝を伸ばしてゆくだろう。関西日仏学館で四〇年以上にわたって教鞭を執りつづけ、京都在住の辛口文化人としてマスメディアで発言することも多かったジャン＝ピエール・オーシュコルヌの人物像や、関西日仏学館の館長を務める以前には上海のフランス人学校で教え、戦前の上海フランス租界と戦後の京都を繋ぐ鍵を握るようにみえるシャルル・グロボワ（館長在任一九五三―五九）の謎めいた経歴などに、私たちの関心が向けられている。第二次大戦以前のフランスは、インドシナと上海と日本（東京・京都）を通じてアジアを見ていた。私たちの歴史探究は、いずれ日本の国境を越え、上海やインドシナのほうへ歩みを進めてゆくかもしれない。

本冊子刊行までの道のりにじかに携わったメンバーは、私とミッシェルのほかに――

長谷川さと子（アンスティチュ・フランセ関西）
藤野志織（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）
沈恬恬（京都大学人文科学研究所）

の三人である。長谷川さんは人文研にとって最良のパートナーであり、私は彼女と組むのでなければ、このプロジェクトを進められなかった。また、藤野さんはラ・クルヌーヴとナントのフランス外交文書センターで関西日仏学館にかんする資料をしらみつぶしにし、片端から写真データに収めたうえで、その目録を作成するという気の遠くなるような出張を何度も繰りかえしてくれた。それどころか、ストラスブール留学中の貴重な時間を割いてまで、私の求めに応じてナントやラ・クルヌーヴを訪れてくれた。長谷川さん、藤野さんには個人的にいくら感謝しても足りないが、二人は協力者というより、私たちのプロジェクトの中軸メンバーであるゆえ、ここには謝辞を記さない。二〇一八年度から本プロジェクトにかかわり、私を補佐してくれている沈さんについても同様だ。

しかし、アンスティチュ・フランセ関西前事務局長ジャン＝ミッシェル・ギヨン氏（Monsieur Jean-Michel Guillon）、そして現・在京都フランス総領事ジャン＝マチュー・ボネル氏（Monsieur Jean-Matthieu Bonnel）にはこの場をお借りしてとくに感謝の気持ちを伝えたい。私たちのプロジェクトにいつもすすんで協力を申し出てくれたギヨン氏は、藤野さんをフランスに派遣するに当たり、外交文書センターのスタッフと連絡をとり、関係資料に当たりをつけてくれた。そのおかげで、どこか無機的で気の滅入る外交文書センターの閲覧室で孤独な作業を続ける藤野さんの負担がいかばかり軽減されたことだろう。ボネル総領事は、私たちのプロジェクト

の重要性を見抜き、これを支持するとともに、学館設立九〇周年の節目のイベントのひとつを人文科学研究所との共催にすることを許可してくれた。その寛大さにあらためて敬意を表したい。

最後にひとつだけ付記しておかねばならないことがある。一九三四年に開館したドイツ文化研究所は、ナチス・ドイツの敗戦後、「西洋文化研究所」への改組を経て、一九四九年、他の二つの研究機関（東方文化研究所、京都大学旧人文科学研究所）とともに、京都大学人文科学研究所に統合された。つまり、ドイツ文化研究所は人文研のルーツのひとつなのである。人文研で発足したプロジェクトの一ブランチである「京都における日欧交流史の初期調査」の歩みが、アンスティチュ・フランセ関西の歴史を辿る作業を通じて、このように、いわば当時のライヴァルの視点から自らのルーツに出逢い直すに至ったのは、おそらくたんに「歴史の妙味」などといったレトリックで済まされることではあるまい。一九三〇年代から一九四五年にかけて、東一条付近で折々に起きていたのは、火花が飛び散るような衝突ではなくとも、世界戦争の目に見えぬ重力のもとで圧し殺されるしかなかった思いや涙の連続、いや不安な悪夢の連続だっただろう。私たちが歴史に耳を澄ませなくてはならないのは、じつはそれらの悪夢の残響をこそ聴きとるためであるのかもしれない。戦後の京都で再開される日欧交流は、たしかにこの悪夢からの目覚めの上に築かれてきたのだから。

二〇一九年一月　　立木　康介

◆著者・訳者紹介

ミッシェル・ワッセルマン（Michel Wasserman）

立命館大学国際関係学部特任教授、関西日仏学館館長（1986–1994）、
関西日仏交流会館（ヴィラ九条山）初代館長（1992–1994）

著書：*Le Sacre de l'hiver : La Neuvième Symphonie de Beethoven, un mythe de la modernité japonaise* (Les Indes savantes, 2006) ;
Mozart à Kyoto (Les Indes savantes, 2008) ;
D'or et de neige : Paul Claudel et le Japon (Gallimard, 2008) ;
Claudel Danse Japon (Editions Classiques Garnier, 2012) ほか

立　木　康　介

京都大学人文科学研究所准教授

著書：『狂気の愛、狂女への愛、狂気のなかの愛』（水声社、2016）、
『露出せよ、と現代文明は言う』（河出書房新社、2013）ほか

編集・発行

京都大学人文科学研究所 みやこの学術資源研究・活用プロジェクト
アンスティチュ・フランセ関西

デザイン（表紙・資料アルバム）

松井美沙（Mojoprint）

印刷所：中西印刷

2019 年 3 月 31 日◇発行